

## Special Essay

## 己れを知れるか

学長 薬師寺道明

日本の陽明学者・東洋思想家といわれる安岡正篤氏の膨大な著書や講演録より短い文章百八を選んで「天籟の妙音」と題した小冊子が出版されている。百八の煩惱を拂うという。

その中の一つに、自分を知る大切さが記されている。

人間なにが悩みかという、自分が自分を知らないことである。人を論じたり、世を論じたりすることはやさしいが、自分を論じ、自分を知ることが、実はこれが一番大事なことである。……と。

しかし、われわれ凡人は自分を論じて本当の自分を知ることができるであろうか。

ある政治家の言葉だが、人には三つのタイプがあるという。話してもわからない人、話せばわかる人、話さなくてもわかる人。私は話さなくてもわかる人が好きだと。

これだと自分がどのタイプであるかがわかるし、ある程度自分を知る物指の一つになるかも知れない。

人間には五種類あるという。そこが家庭であっても職場であっても。

その一つは、そこに居なくてはならない人。その二は、居た方がよい人。第三は、居ても居なくてもよい人。第四は、居ない方がよい人。第五は、早く居なくなった方がよい人。凡人は上段の二つに入りたいと思うであろう。

約一年前の朝日新聞の「愛の旅人」の欄に改めて紹介された山本周五郎の「ながい坂」は、週刊新潮に一年半にわたり連載されたものであるが、多くの読者に感動を与えた。

下級武士として生まれた主人公の三浦主水正が、苦しみながら人生の長い坂道を一步一步登っていく半生が描かれている。最後に城代家老主水正として登城する場面がある。「ここが坂だったのか」と彼が呟いた。脇見をする暇さえなく、けんめいに「ながい坂」を登ってきたからであろう。己れの評価や己れを知るときかもしれない。

